

『枕草子』における中関白家の栄華を彩る紅梅

山本茂樹

はじめに

清少納言が仕えた中宮定子の父・藤原道隆は、関白としてその地位を磐石なものとした。道隆の一家は中関白家と呼ばれ、隆盛を極めたが道隆の死後、中関白家の栄華は陰りを見せ始め没落の一途をたどる。しかし、『枕草子』ではそのような暗い側面は描かれることなく、中関白家の栄華のみを描いていることで知られる。一族の栄華は、主に日記的章段と呼ばれる章段に見ることができる。日記的章段には、中関白家の日々の様子が事細かに記されており、情景から服飾の描写まで細部にわたる。そこで第一〇一段、二六二段を通読すると、「紅梅」という色彩が多用されていることに気付く。先行研究においてもそのことは示唆されているが、第一〇一段、第二六二段について詳細な分析がなされていない。そこで本稿では、『枕草子』において紅梅がどのように位置づけられているのかを分析し、中関白家との関連性を考察す

る。そして、特に中関白家の盛時を語ることで有名な第一〇一段、第二六二段を中心に中関白家の栄華を称える表現を探り、『紅梅』に着目して清少納言の表現の意図を明らかにしたい。

第一章 日本文学における梅

日本文学において、梅は様々に描かれている。梅は春の訪れを告げる花であり、開花時期は陰暦で二月頃。襲の色目や色彩語としても「紅梅」が用いられ、第二三段「すさまじきもの……三四月の紅梅の衣」と言い表されるように、衣装を着る時期にも厳格なきまりがあったようである。『枕草子』における「紅梅」の傾向については第二章以降で分析すると、まずは『枕草子』以前の日本文学における梅の概略をたどりその変遷を考察する。

日本の文学作品に初めて「梅」が登場するのは奈良時代の『懐風藻』である。

五言。春日翫鶯梅。一首

聊乘休暇景 入苑望青陽 素梅開素靨 嬌鶯弄嬌聲
對此開懷抱 優是暢愁情 不知老將至 但事酌春觴

梅の事例はこれ以前に検索することができない。それは、梅樹が中国から渡来したものであり、奈良時代以前には日本に存在しなかったためだと推察される。「懷風藻」には「素梅」という表現が見られるが、これは白梅を表すと考えられる。なぜなら紅梅が渡来するまでは紅梅自体が存在しないのだから、梅の色を特定する必要がないためである。したがって、紅梅とことさらに限定されるようになるまでの漢詩や和歌の題材となった「梅」は白梅が続く。またこの頃の漢詩や和歌に詠まれる「梅（白梅）」は①香を賞美するものと②漢詩文の表現に則り、白梅を他の白い対象（雪や卯花）と見紛い、白梅の美しさを強調するものに大別される。しかし、『万葉集』の歌に多くとられた白梅も、時代の趨勢とともにその関心の初出は『続日本後紀』承和十五（八四八）年正月二十一日条である。

上御仁寿殿、内苑如常、殿前紅梅、便入詩題

この資料から、九世紀中頃には仁寿殿に紅梅があり、内宴の場で紅梅が詩題になったことがわかる。そして勅撰集で紅梅が初めて

登場するのは『後撰和歌集』に載録された「紅に色をば変へて梅花香ぞことごとくにほはざりける」である。この歌から梅に対する関心の中心が、香に加えて美しい色彩をも持ち併せる紅梅に移っていったことが察知される。白梅を中心に展開されてきた文化の中に、鮮やかな色彩をもった梅が渡来してきたことで、紅梅が重宝されたと思われる。それでも白梅と比較すると、紅梅が詠まれた歌は圧倒的に少ないが、歌に詠まれるほどに関心が寄せられていたことは間違いない。そこには桜への関心が高まる中で、平安時代の人々が艶やかな色彩に傾倒した状況がうかがえる。紅梅もその時代の流れで注目されたのだろう。しかし、その色彩を賞美する方法は白梅に関連する雪とともに詠まれるなど、紅梅の詠み方が定まらず一般化されていなかったようである。

また『古今和歌六帖』では、「梅」の標目と「紅梅」の標目が明確に区別され、『和漢朗詠集』では「梅付紅梅」と紅梅が梅（白梅）に対して従属的な扱いとなっているが、それぞれが対照関係にあったことがわかる。

このような流れの中で、『枕草子』に紅梅が描かれたことを確認し、次章からは清少納言が紅梅という色彩をどのように扱っているのかを検証していく。

第二章 清少納言と紅梅

第一節 紅梅の濃淡

前章では日本文学作品における「梅」の特徴をまとめた。白梅の後に渡来してきた紅梅は、その鮮やかな色合いから平安王朝の人々に注目されていたことは間違いない。そして『後撰和歌集』に詠まれた影響か、私家集にも紅梅が多く詠まれるようになる。その中でも、清少納言と関わりの深い人物の和歌を検索すると、父・清原元輔の私家集『元輔集』に紅梅に関連する歌を多くみつけることができる。

『元輔集』に収録される梅は紅梅が多く、元輔が紅梅に関心を寄せていたことがうかがえる。特に元輔の歌には紅梅の濃淡を詠んだ歌が多く、それまでの紅梅の色の捉え方とは異質である。具体的には、「色濃く」「色深き」「うすく濃く」などの色の程度を表す言葉が含まれる。その中でも注目したいのが、八二番歌「梅の花香はことごとくに匂はねどうすく濃くこそ色は咲きけれ」である。八二番歌は、『後撰和歌集』に収録された「紅に色をば変へて梅花香ぞことごとくにははざりける」を踏まえていると思われる、日本文学史上最初に詠まれた紅梅に影響を受けている。また「濃さ」や「深さ」だけでなく「うすさ」にも注目している点は、元輔に独特の視点である。

このように、白と紅との対比ではなく、同系色の微かな違いに

『枕草子』における中関白家の栄華を彩る紅梅

目を向ける美的感覚は、清少納言にも継承されている。『枕草子』においても、紅梅の色を捉えた表現として第三五段に「濃きも薄きも紅梅」、第一〇一段に「紅梅いとあまた濃く薄くて」などの濃淡に着目した表現が見られる。これは『枕草子』第九六段からも読み取ることができるが、清少納言が歌人として有名な父を意識していたからであり、少なからず影響を受けていたためだと考えられる。本節ではさらに踏み込み、清少納言の紅梅に対する評価と関連して、特に第三五段「木の花は 濃きも薄きも紅梅」について考察を述べる。

濃い色でも薄い色でもやはり紅梅の色が美しいと感じる美的感覚は、紅梅の色彩を絶対的なものと捉えており、清少納言の紅梅という色彩に対する思い入れが伝わる。元輔の影響もあり、紅梅に対して繊細な感覚を有していたことを押さえておく。さらに桜と藤を見る清少納言は、その「色濃」さにもみ焦点をあてるが、紅梅に関してはやはり濃淡に着目しており、紅梅という色彩のグラデーションを特別視していたように感じる。

第二節 色彩の対比表現

伊原昭氏は、清少納言が対立的な色彩の対比表現をよく用いることを指摘している。紅梅の場合、対比される色は白であり、『枕草子』においても紅梅と白との対比表現はしばしば見られる。それは、紅梅と対照される白梅を意識してのことだろう。また、清少納言の色彩に対する態度として、二色の色彩に優劣をつけず

に同等に扱ふ姿勢が認められるとする。以上を踏まえ、たうえで、『枕草子』における紅梅と白との対比表現を確認する。

第三九段は、内裏の東庭に植えられた紅梅と内裏外の「あやしき家」の梅（白梅）が対比されている。第四八段は、馬の薄紅梅色の毛並みに混じった鬘、尾の白。第八〇段は、内裏の梅壺に、東西に対比して植えられた紅梅と白梅の情景描写。そして、第一二八段は、藤原行成が白紙に白梅をつけたことに対応して、清少納言の返事が赤い薄様と紅梅である。

ここまで、直接的に「紅梅」と表記されている事例だけを取り上げてきたが、梅の色彩に関連する事例として第四〇段も確認しておく。

第四〇段では、梅花に降りかかる雪が「あてなるもの」として取り上げられている。ここには「梅花」としか表記されていないため判別し難いが、果たしてこれは紅梅と白梅どちらであろうか。論者は、この梅花を白梅であると判断する。第一章で確認したように、白梅には雪のとりあわせが一般化されていたようである。清少納言もそれに倣っているのだろう。そこで、これまで挙げた事例に第四〇段を加えて考えてみると、清少納言の梅の色彩に対する傾向がつかめる。

清少納言は、色彩として梅をみたときには、紅梅と白との対照的な美しさを見出していたと思われる。そのことは、第四八段からみなすことができる。他方、植物の梅については同じ色の組み合わせを好む。それが、第四〇段と第一二八段の事例である。第

一二八段の例は、それに加えて色彩の対照を創出する工夫が見られる。また植物として梅を捉えたときには、第三九段と第八〇段より、紅梅と白梅が別のものとして意識されていたことがうかがえる。

以上をまとめると、植物の梅は同色の色とのとりあわせが賞美され、色彩としての梅すなわち「紅梅」色は反対色である白との対比が賞美されていたようである。本節では、それぞれの事例で紅梅と白が対比されていることを確認するとともに、両色が互いを見事に引き立て合っていることを押さえる。

第三節 紅梅による賛辞表現

第一七八段にも紅梅の事例が見えるが、これまでに挙げた事例とは性質が異なるため節を改めて考察する。この章段は、清少納言が宮仕えを始めて間もない頃の出来事である。憧れの中宮定子を目の前にし、慣れない宮仕えに戸惑う様子が語られる。新参者の清少納言は、中宮定子の一举一動に心惹かれ称賛の念が絶えない。

その中でも、寒さで仄かに赤みを帯びた中宮定子の手を「いみじうにほひたる薄紅梅」と表現している点に着目する。薄紅梅であることに対して「かぎりなくめでたし」と称賛していることが、紅梅という色が直接的に賛辞表現たり得ることを示している。さらに、薄紅梅の手への称賛はこれにとどまらず、「かかろ人こそは世におはしましけれ」との感想からは清少納言の中宮定

子への心酔ぶりがうかがえる。ここでは、紅梅という色彩自体が賛辞表現として機能していることを押さえておきたい。宮仕え初期に清少納言がみた定子に対する「紅梅」というイメージは「枕草子」全体を通して貫かれていく。清少納言にとって生涯慕い続けることとなる定子の初見の印象というものはそれほどまでに衝撃的だったのだろう。この「薄紅梅」色を見出した清少納言の感覚が、定子に対して初めて抱いた印象だということ等重要視したい。

第三章 中閨白家の栄華を彩る「枕草子」

本章ではいよいよ第二章を踏まえて、第一〇一段、第二六二段における「紅梅」を詳細に分析する。

第一節 第一〇一段における紅梅

第一〇一段は、春宮に入内した淑景舎（原子）が一族と対面する場面である。道隆薨去の二月前の出来事であり、中閨白家の最後の栄華を記している。定子、原子の衣装描写が克明であり、いずれも紅梅を着用している。

第一〇一段における「紅梅」は、主に中閨白家の人々の衣装描写である。この場面は、屏風の陰からその場の様子を実況するかのように描写が事細かに記されている。例えば、定子や原子、道隆の向いている方角や位置までも書き記すさまは、状況を立体

的に記そうとする清少納言の意図を感じさせる。清少納言の視点からは特に、中閨白家の衣装の色彩が目にとまったようである。以下、第一〇一段の要点を三点に分けて整理する。

一つ目は、中閨白家の姫君が紅梅を身につけている点である。初めに紅梅の衣を身に纏う定子の姿には「めでたし」と感嘆している。加えて「奉る御衣の色こと」とは、お召し物の色（紅梅）が特別での意であり、定子が紅梅を身に纏っているだけで称賛している。そして、初対面の原子も同様にすばらしいお方だと推量し、実際に紅梅の桂を引き重ねた原子を覗き見た際には「げにめでたくうつくし」と重ねて称賛している。この原子の桂のグラーデーションは清少納言の好むところであり、「紅梅いとあまた濃く薄くて」という表現も濃淡に着目したものとなっている。また定子と原子いずれの衣装描写においても、まず紅梅が目に向いている点は特筆すべきだろう。

二つ目は、中宮定子が「紅梅には濃き衣こそをかしけれ。え着ぬこそくちをしけれ。今は紅梅のは着でもありぬべしかし。されど萌黄などのにくければ。紅に合はぬが」と紅梅批評を展開している点である。先行研究では、「今は紅梅のは着でもありぬべしかし。」の解釈が争点となるが、ここでは中宮定子自ら紅梅の衣装について言及している点を押さえておきたい。定子が紅梅（経糸紅、緯糸紫の織物）に合う衣の組み合わせを論じているが、このように定子が紅梅の衣について発言することで、少なからず紅梅に読み手の注目が集まる。

三つ目は、定子、貴子、原子の描写方法である。位置関係が明らかになつたことにより、場の様相を俯瞰的に捉えることができる。その結果、この場面においても色彩の対比表現を見出すことができるのではないか。清少納言は、色彩の対比表現にもこだわりがあり、色の配置にも何らかの意図があると考えられる。そこで、定子の母・高階貴子の衣装描写に着目する。すると、この栄華を彩る重要な場面において、色鮮やかな紅梅を着用した二人を分断するように、白い表着や女房の裳を身につけた貴子が登場する。これはたしかに場違いの感が否めない。しかし、一見不自然だと思われる描写も、清少納言の色彩感覚によるものだと考えられるのではないだろうか。つまり、紅梅と白の二色を着ている人物を交互に据えるという描き方は、清少納言の色彩の対比表現に對する態度と一致する。そして二色を対比するときに、交互に置く手法はこれまでの紅梅の事例にはなく、読み手に鮮烈な対比の美しさを印象づける。

第二節 第二六二段における紅梅

第二六二段は、法興院の積善寺供養の場面である。『枕草子』において最長段であり、中閨白家の人々が一堂に会し、中閨白家の栄華を象徴する章段である。清少納言の宮仕え初期の場面であり、前年には淑景舎の入内、道隆の閨白就任があり、中閨白家の權威を誇示するこの上ない場面でもある。

この章段では、中宮定子だけではなく、その場に在る女房たち

も含めて「紅梅」を身につけている。その光景は、「ただ光り満ちて見ゆ」と称されるように圧巻である。このように、「紅梅」一色で統一される描写は、読み手の視覚印象にはたつきかける効果をもたらすと考えられる。その他にも、閨白道隆からの禄が「紅梅の細長」であり、中閨白家の将来の担い手である伊周の長男松君までもが紅梅を着用している。これは中閨白家の栄華は伊周の代で断絶してしまうが、先々まで栄華が続くことを期待させるものである。中閨白家の人々がここまで紅梅づくしなのは、何らかの意図を感じざるを得ない。

また定子が料紙の色を衣の色を揃えた配慮をこの上なく称賛しているが、衣の色と料紙の色を揃える行為は『源氏物語』梅枝巻にも見られ特段めずらしいことではなく、紅梅を契機とした贅辞の表現が過剰だといえる。紅梅に對する思い入れの強い清少納言が、自身が仕える中閨白家の栄華を称える章段において、紅梅を散りばめていることに意義を見出したい。

おわりに

以上に見てきたように、第一〇一段、第二六二段における中閨白家の服装の色彩に着目し、『枕草子』における「紅梅」の位置づけについて論を展開してきた。実に『枕草子』全体の二十三例のうち十一例の「紅梅」がこの二章段に集中し、中閨白家の人々は必ず紅梅の衣を身につけている。さらに、その容貌を称える表

現として「いみじ」「めでたし」「うつくし」「光り満ちて見ゆ」などの賛辞の表現を伴って用いられていることに留意したい。また、いずれも二月の記事であり、梅の開花時期とも共通することにも触れておく。

平安王朝において色彩のもつ効果は大きかったということが察せられる。すると、清少納言が仕えた中閨白家の栄華を語る章段では、「紅梅」が多用されており、そのほとんどが衣装描写である。そして定子の紅梅批評の発言をとりあげたり、紅梅と白との対比表現を巧妙に用いたり、紅梅が際立つような工夫も見られる。このような工夫からも清少納言が、色彩に関して鋭敏な感覚を有しており、色彩が読み手に与える印象効果を巧みに扱っていることがわかる。また、数ある色彩のうち特に「紅梅」という色がただの今様色という意味にとどまらず、清少納言にとって少なからず父の影響を受けた特別な色であったこともこれまでに確認した。そのような清少納言の色彩感覚が、中閨白家の日々の様子から「紅梅」を意識的に選びとっているのである。

つまり、「枕草子」において「紅梅」が中閨白家の栄華を象徴する色として規定されているのではないかと考える。そのように考えると、他作品と比較して『枕草子』に紅梅の衣装描写が多い（紅梅の衣装描写は『枕草子』十六例、『源氏物語』七例、『紫式部日記』六例）ことも頷ける。したがって、「枕草子」において紅梅という色彩と中閨白家が結びつき規定されることで、華やかな催しを演出し、中閨白家の栄華を描いたと結論づけて結びとす

る。

注

- (1) 松田豊子氏は「中宮定子をはじめ、淑景舎原子、大納言伊周、その他、中閨白家の姫君たちが、それぞれの衣裳を、紅梅の色彩で統一している。（中略）この姉妹は、着用が可能な限界まで、衣料の色彩に、紅梅の濃淡を愛用するのである。」と指摘している。
- (2) 三条西装束抄によると、紅梅（表紅・裏紫）の着用時期は十一月から二月。
- (3) 第一章の梅の概略については、・松田豊子「枕草子の紅梅考―清少納言の紅梅映像―」（『光華女子大学 研究紀要』第八集、一九七〇年十月）、倉田実「庭園思想と平安文学 寝殿造から」第12章「紅梅の庭―『源氏物語』の二条院と紫上の最期―」（花鳥社、二〇一八年）を参照した。
- (4) 『古事談』『拾芥抄』に紫宸殿南庭の白梅が桜に植え替えられたという記事がある。
- (5) 『貫之集』には「紅梅のもとに、女どもおりてみる 雪とのみあやまたれしを梅のはなくれなるにさへかよひけるかな」「女、紅梅を見るほどに雪降り、くれなゐと雪とはとき色なれど梅の花にはなほかよひけり」が載録されている。
- (6) 中宮定子の「元輔がのちといはるる君しもやこよひの歌

にはづれてはをる」に對し「その人の後といはれぬ身なりせばこよひの歌をまづぞ詠ままし　つつむ事さぶらはずは、千の歌なりとこれよりなむ出でまうで来まし。」と返している。

(7) 清原元輔の影響については松田豊子氏も指摘するところである。

(8) 伊原昭「色彩の対比的表現―枕草子における―」(伊原昭『平安文学の色彩―特に散文作品について―』笠間書院、一九六七年)

(9) 『源氏物語』梅枝卷には「紅梅襲の唐の細長添へたる女の装束かづけ給。御返も其色の紙にて、御前の花をおらせてつけさせ給。」の記述がある。

(やまもと・しげき 二〇一八年度本学卒業生)